

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3434 号 2017.1.1 発行



ひきこもり新聞 創刊

NHKニュース 2016年12月31日

「親が亡くなれば私もどうしようもなく死ぬでしょう」

「働くことは“不可能なこと”としてある」

ひきこもりの人や、ひきこもり経験のある人たちが、11月、新聞を創刊しました。長らく社会との関わりを断ってきた人たちが、なぜ外に向けて発信を始めたのか？

今、ひきこもりの人たちをめぐる課題に向き合おうとする当事者たちの姿取材しました。
(ネット報道部・蔵重龍)

ひきこもり新聞 なぜ発刊

「年末年始は、エネミー（敵）がやってくる」

「甥っ子、姪っ子にお年玉を上げるのを、うまく逃れる方法はないか」

先月創刊した、ひきこもり新聞の編集会議での話し合いの様子です。

なんだか軽い話をしているようですが、編集に関わる人たち全員が、ひきこもりの当事者か経験者です。

編集長の自宅を兼ねたアパートの一室が新聞の編集部。この日開かれた会議には16人が集まっていました。年齢は20代から50代まで、女性も数人いました。関東一円から、



さらには仙台から来た人もいました。編集長の木村直弘さん（32）もひきこもりの経験があります。

大学受験に失敗して自宅で浪人していたころ、最初のひきこもりが始まりました。大学では、ゼミの同級生などと普通につきあえる状態でしたが、卒業後、弁護士を目指し司法試験の勉強するうちに、再びひきこもりがちになったといいます。思うように勉強の成果が出ず、もんもんとする日々の中、両親からは、毎日のように「お前には弁護士なんて無理だ。早く就職しろ」と言われ続けました。

その後、ひきこもりの状態が続いていましたが、両親との関係はどんどん険悪になり、両親のほうが自宅を出て別居することになりました。

そして去年5月、突然、両親が警察官を連れて木村さんのもとにやってきて、無理やり自

宅から引き出されそうになったと言います。



そのとき木村さんは「怒りと恥ずかしさ」、そして「犯罪者扱いされたことに対する悔しさ」を感じたと言います。その後、精神科の専門医の診療を受け、今はおおむねひきこもりの状態から回復しています。

そんな木村さんが、新聞の発行を思い立ったのはことしの夏です。

ひきこもり支援の名の下に、強制的にひきこもりから脱せさせようとする一部の支援施設のことを知り、当事者

の声を聞かず、生き方を否定するような対応を、自分が両親や社会から受けてきた対応と重ね合わせたと言います。

そして、社会が抱えているひきこもりのイメージを覆したいと、当事者の自助グループで知り合った人たちと「全国ひきこもり当事者連合会」を結成し、新聞の発行を決めました。

「マスメディアでは、ひきこもりは、無能で無気力で、努力をしない人間として取り上げられることが多く、実像を伝えていない。当事者の生の声を聞いて、思いを受け取ってほしい。本当のひきこもりは自分のことを語れないとも言われていますが、そうした人の声こそ、なんらかの方法で届けていきたい」（木村さん）



創刊号 悲痛な叫びが紙面に

当事者たちの生の声を伝えようと創刊された「ひきこもり新聞」。

先月発行された創刊号に寄せられた当事者の男性の手記には、次のような言葉がありました。

「今も自らをコントロールできる自信がありません」

「働くことや集団にコミットすることは“不可能なこと”としてある」

「親が亡くなれば私もどうしようもな

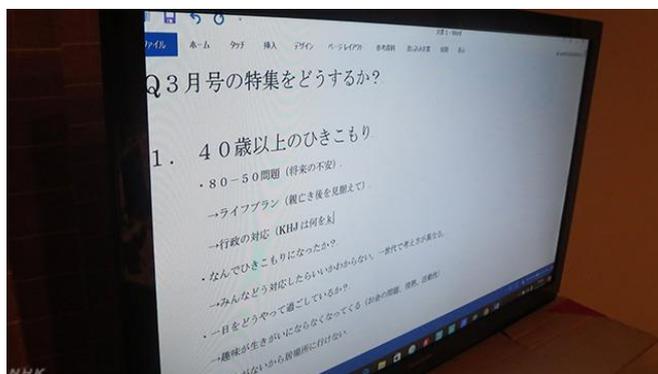
く死ぬでしょう」

10年以上ひきこもりを続けている埼玉県の男性が、メールで編集部に寄せたものです。創刊号には、このほか▽長年ひきこもりの研究を続けている精神科医のインタビュー記事▽ひきこもりの恋愛について話題▽家族や当事者どうしがつながりあうイベントなどの情報も掲載されています。

創刊号は、2000部が印刷され、一部500円で販売しています（ひきこもりの当事者は100円）。これまでに、全国に50団体以上あるひきこもりの子どもを持つ親の会のメンバーや関係者を中心に、600部ほどが売れたと言います。今後は、隔月で発行する予定です。

ひきこもりの高齢化 熱い議論

取材をした、この日の編集会議では、来年3月に発行する3月号の特集について、取材方針や編集内容の議論が行われました。特集のテーマは「ひきこもりの高齢化」です。



ひきこもりの当事者が50代に、親が80代になっているケースもあり「80・50問題」などとも呼ばれています。

この日の編集会議の参加者の中にも、その当事者がいました。

「このまま一人で死んで、誰にも気付かれず部屋で死体が腐っていくことを毎日のように考えてしまう」

こう話す54歳の男性は、足かけ30年ほどひきこもりの状態で、今でも当事者どうしの集まりに出る以外は、ほとんど部屋に閉じこもっているといます。

また、若いころには中学校で教鞭をとった経験もあり、常に社会復帰を望んできたと言う50歳の男性は「私は諦めていない。いつでも働きたいという意欲はある。だから苦しい。たとえ中高年でも、やる気のある人は新人として受け入れられる社会になってほしい」と訴えました。

40歳の女性は「ひきこもりの人はみな、お金に苦しんでいて、パイトの面接で出した履歴書を返して欲しいと言う人も多くいる。公的な就職支援の対象年齢は、39歳までのところが多く、40歳になって強い焦りを感じている」と話し、ひきこもりの人が置かれている社会的な構造から解きほぐした記事を書くべきだと訴えました。



当事者たちが話し合うだけに議論は白熱し、それぞれが知り合いをたどって、少しでも多く生の声を伝えていく方針を確認しました。

自分が死んだあとは 高齢の親が直面するお金の悩み

編集長の木村さんは、実際に取材にも足を運びます。

この日は、「ひきこもりの高齢化」をめぐって、NPOが主催した都内でのイベント取材しました。

ファイナンシャルプランナーらが、中高年のひきこもりの子どもを抱える高齢の親たちの生活設計について、相談を受け付ける座談会です。

42歳の次男がひきこもっている埼玉の女性は「就労は何度もチャレンジしているが、40歳をすぎると非常にむつかしい。自分が死んだあとに、子どもに何を残せるのか、切実なことです」と話していました。

また、まもなく40歳になる息子を持つ千葉の60代の男性は「これまで具体的に考えることを逃げてきたかもしれないと気付かされた。親としての覚悟があるのだと思った」と話していました。

取材を終えた木村さんは「親の声を直接聞いたのは大変よかった。お金の話がとても大切なのだと改めて感じた。記事作りにもいかしていきたい」と話



していました。

ひきこもりが発信 その意味は

新聞の編集部には、さまざまな経歴を持った人が集まっています。

大学時代に社会人サークルの文芸雑誌の編集に携わった経験があり、IT技術にも詳しい



30代の副編集長。アニメ制作の専門学校で学んだ経験があり、絵が得意な20代の女性。そのほか、漫画や音楽が得意な人など、それぞれの経験や得意分野を生かして、新聞作りを目指しています。

取材した編集会議の話し合いは、懇親会も含めて9時間にもおよびました。

参加者たちの熱意と真剣さに圧倒されました。

ちょうど、「まとめ記事サイト」の問題が、メディアで話題になっていたため、自分たちの新聞が、事実を正確に伝えられるのか？ゆがんだ主張にならないか？どういった視点から取材すべきか？どうすればアピールできるか？などについて、取材をしていた私が、何度もたずねられました。

ひきこもり新聞では、『**当事者としてのエピソード、メッセージ性を盛り込む**』『**私たちがなく、私は、で語る**』など、編集のガイドラインについても、みんなで議論して決めています。

新聞を発行するという事は、当事者どうしが互いに支えあうだけでなく、社会的な責任を連帯して負うことで、ひきこもりから脱却し、積極的に社会に関わっていくためのトライアル、積極的なリハビリのような役割も果たしていると感じました。

内閣府がことし発表した去年12月の時点での推計では、ひきこもりの人の数は全国でおよそ54万人。前回6年前の調査より長期化・高齢化の傾向がありました。ただ調査の対象は若者の支援が目的だったため、これは15歳から39歳までの人数です。40歳以上のひきこもりの実態はよくわかっておらず、一説では、中高年も含めると100万人はいるのではないとも言われ、日本の将来を考えるうえで向き合うべき大きな社会問題となっています。

ひきこもりの当事者や経験をした人たちの生の声に耳を傾けることは、今こそ、日本社会に求められていることだと思います。

「ここにいる当事者や経験者たちは、ほかのひきこもりの人たちの体験を聞いてみな救われています。今はそれぞれが胸のうちに納めているひきこもりの体験・経験には、必ず意味があると思います。痛みや苦しみの経験は誰かを癒やすかもしれません。当事者が沈黙する時代を終わらせたい」(木村さん)

京大卒の大道芸人 高齢者向けレク本出版

大阪日日新聞 2017年1月1日

「家族でも楽しめる」とアピールするたつきゅうさん

関西を拠点に活動する京大卒の大道芸人、たつきゅうさんが、『笑って楽しい！高齢者レクリエーション』（法研）を出版した。高齢者施設や介護予防教室での活動を基にまとめた簡単に誰でも楽しめるアイデア満載の1冊。たつきゅうさんは「日常に笑いを届けたい」と話している。

たつきゅうさんは京大時代にジャグリングを学び、同大大学院に進むも「中途半端はだめだ」と退学して芸の道を選んだ異色の大道芸人。2014年からは大学院で学んだ計量経済学を生かし、高齢者施設などの訪問活動を展開している。



「この10年で笑いの効用は高く評価されるようになった」とたつきゆうさん。施設で大道芸を通して笑いの効用を楽しくレクチャーする中で、「僕の行うレクリエーションは笑うきっかけづくりで、それを日常に落とし込むことが大切」と、これまでの経験や出し切れなかったことを分かりやすく1冊にまとめることを決めた。

■イラスト交え

同書は7章立てで、「簡単に親しみやすい」というバルーンアートは2章分を使って紹介。輪の状態から力を加えただけで完成する「ハート」や、定番の「犬」「花」などもイラストを交えて丁寧に説明。介護施設などでは、「利用者にとって難しい風船先を縛るところなどを、職員と役割分担しながら進めるとコミュニケーションが取れて楽しめる」という。

6、7章では家庭で子どもたちでも楽しめる、お手玉一つからできるレクリエーション、トランプを使ったマジック、皿回しやコップの早積みなどの一発芸を紹介した。

またレクリエーションの計画表や振り返り表の作り方についても解説し、「施設で職員の人にも活用してほしい」とアピールする。

■病院に笑顔を

たつきゆうさんは、小児科の病棟を訪問し芸術を届ける「スマイリングホスピタルジャパン」に参加し、入院中の子供に笑いを届ける活動も行っている。大人向けの病院での活動も視野に、夢は「病院常設の演芸コーナー」だ。

出版についても、「手を使わないでもできる脳トレなどもある」とアイデアは沸き上がるばかり。ただ不慣れな出版作業にややお疲れ気味で、「書く方はいったん休み、さらにネタを仕込んでいく」と芸の鍛錬にも余念がない。

<いのちの響き>優しさは強さ 宮城まり子さん「障害者にきめ細かい施策を」

東京新聞 2017年1月1日



相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」が襲われ、19人が死亡、27人が重軽傷を負った事件で、障害者排除を正当化する容疑者の供述が、各方面に今も暗い影を落としています。決して許されない犯行ですが、私たちの心の中にも、障害者を異質なものとして見る意識はなかったでしょうか。

今年は、施行されたばかりの障害者差別解消法を育てていく大事な年。偏見をなくすために障害者のことをもっと知る必要があると私たちは考え、障害者の暮らしに焦点を当てる「いのちの響き」を、生活面で随時掲載していきます。初回は、日本で初めて障害のある子どもの養護施設をつくった女優宮城まり子さん（89）のインタビューです。（諏訪慧）

ねむの木学園をつくったのは、「就学猶予」という言葉を知ったのがきっかけです。

雑誌で受け持っていた「まり子の社会見学」という連載の取材で病院を訪れたところ、初めて耳にしました。三十歳を過ぎた一九五八年ごろのことです。

詳しく聞くと、障害のある子どもたちは学校に通わせてもらえないとのこと。憲法では、親が子どもに教育を受けさせるのは義務なのに。

「障害のある子が、他の子どもと違う扱いを受けるなんて絶対におかしい」と怒りが湧いてきたの。養護学校（現特別支援学校）での教育が義務化される七九年まで学校に通えないことが多かった。

同じころ、ある舞台で脳性まひの子どもを演じることになり、いろいろ調べるうちに、障害者に対する制度が整っていないことも分かりました。

当時の私のヒット曲に「ガード下の靴みがき」という歌があります。この歌は没になって、レコード会社のごみ箱に捨てられていた原稿用紙を私がたまたま見つけて、「歌いたい」とお願いしてレコード化されました。

間奏に「お父さん、死んじゃった。お母さん、病気なんだ」と男の子の話し声が入りま

す。歌詞は作詞家の先生が書いていますが、せりふは私が考えました。

よく出演していた日劇（日本劇場）最寄りの有楽町駅周辺には、靴磨きをしている子どもがいて、生活の糧を得ていました。そんな状況に腹が立ち、せりふを入れたんです。

ねむの木学園につながる私の活動は、就学猶予に対する怒りと、「ガード下の靴みがき」がヒットしたことに対する責任と感じています。十二歳のときに結核で亡くなった母に「自分よりも弱い子を見たら、お手伝いするのよ」と育てられたのが、影響しているかもしれません。

当時、障害があつて複雑な家庭環境の子どもが暮らせる施設はありませんでした。

親がいなかったり、世話ができなかつたりする子どもが暮らす児童養護施設はありましたが、施設側が体の不自由な子どもには対応できなかったんです。そこで有り金をはたき、体の不自由な子どもたちのための養護施設をつくりました。六八年のことです。「女優の道楽」と陰口も言われました。

開園時にここで暮らし始めたのは、小学校入学前後の八人。みんな脳性まひです。自力で歩けたので、今から考えればそれほど障害が重い子たちではありませんでしたね。

とはいえ、突然発作が起きて大変です。職員は四人だけですから、食事当番は私もやりました。初めて作ったコロケは、揚げている最中に爆発しちゃって失敗。料理は好きだけど、十二人分なんて作ったことないですからね。

ねむの木学園を始めるに当たり、一緒に暮らしていた故吉行淳之介さんと三つの約束を交わしました。お金がないと言わないこと、愚痴をこぼさないこと、途中でやめないこと。でも、お金が足りなくなりそうになったときなど「やめたい」と口に出したことはいっぱい。愚痴もこぼしてばかりでした。

この半世紀、法律が整備されるなどして障害のある人を巡る環境はだ一ん、と良くなりました。何といつても学校に通えるようになりましたから。でもね、施策にもっときめ細かさがいるんじゃないかしら。

昨年七月、相模原市の障害者施設で大変な事件がありました。とても驚いて、なぜこんなことが起きるのだろうと随分考えました。

逮捕された男には精神疾患があるとされ、事件前は措置入院していましたね。犯行に及ぶ前に退院していますが、退院時の病状はどうだったのでしょうか。一人一人に寄り添い、状態を見極めてあげる福祉制度があれば、違ったのではないかと思うのです。

あとね、障害者施設で働く人がもう少し、お金をもらえるようにならなきゃいけない。ある程度、豊かでなければ、そういつも笑顔でいられません。施設が職員を集めるのだから、とても大変なんです。

ねむの木学園のテーマソングにはね、「やさしくね やさしくね やさしいことはつよいのよ」という歌詞があるんですよ。そう、優しさは強いんです。

絵画や歌、踊り、茶道に力を入れています。私が好きだからというのもありますが、個性を発揮し、集中力を養うのに効果があると思うんです。集中力は何にでも応用がきくでしょ。毎年のように美術展を開き、多くの人が鑑賞してくれます。学園を続けてきて良かったとつくづく思います。

私は年を取って自分で歩けなくなり、車いすが必要になってしまったけれど、まだやり残したことがあります。もっと優しさを広めたいのです。

<みやぎ・まりこ> 1927年3月、東京都生まれ。女優、歌手で「ねむの木学園」園長。54年に「毒消しゃいらんかね」でNHK紅白歌合戦に初出場し、出場は延べ8回。作家の故吉行淳之介さんと暮らした。障害者の福祉と教育に尽くした功績が評価され、2012年に瑞宝小綬章を受けた。

<ねむの木学園> 静岡県掛川市にある日本初の障害児のための養護施設。宮城まり子さんが私財を投じて、1968年に開設した（当時の場所は静岡県浜岡町＝現御前崎市）。当初から、地元小学校の分校を設けたほか、養護教育が義務化された79年には、全国初の私立養護学校（小・中学部）を開校。3年後には高等部も設置した。現在は大人が暮ら

す施設もあり、4歳から70代の74人が生活している。

黒岩・神奈川知事 新春特別インタビュー 共生社会と未病改善に意欲

産経新聞 2017年1月1日

平成29年が始まった。就任から6年、2期目の折り返しを迎える黒岩祐治知事は、昨年発生した相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」における未曾有の殺傷事件を受け、その悲しみを乗り越えようと「共生社会」の実現に向けた県政運営に意気込みを示す。また、健康寿命を延ばすための「未病改善」や2020年の東京五輪・パラリンピック開催を契機にした観光戦略などを披露。新春を迎え、その意欲は熱を帯びている。

◆心の問題取り組む

――知事は昨年策定した憲章にある「ともに生きる」としたメッセージの発信に力を入れています

「やまゆり園の事件は昨年最大の衝撃的な事件でした。『障害者はいなくなった方がいい』といったとんでもない発想に基づいた独善的な犯行で、許すことはできない。しかし、悲しみに暮れるだけではいけません。その怒りや悲しみを力にしながら、立ち上がっていかねばと、強い思いを抱いています」

――共生社会の実現を目指した『ともに生きる社会かながわ憲章』には、どのような思いが込められているのですか

「憲章の策定プロセスでは、当初、『障害のある人もない人も』という表現があったが、私は違和感を覚えていたんです。障害がある人となない人に分けること自体がおかしいのではないかと。その後、議会と検討を重ねた結果、『すべての人』との表現に落ち着きました。磨き上げた文章であり、広く浸透させることが大事だと思っています」

――この憲章をもとに具体的にどのような展開を考えていますか

「再発防止に向け、福祉施設の防犯体制強化といったハード面での整備だけではなく、(差別や偏見といった)心の問題にしっかり取り組んでいかなければならない。ダウン症の書家として知られる金沢翔子さんに『ともに生きる社会かながわ憲章』にもある“ともに生きる”という言葉をしたためてもらいましたが、さまざまな場面を通じて発信していきたいと思っています。今年は『共生フェスタ』というイベントを開催し、“ともに生きる”との精神を広く伝えていくように準備を進めています。これらの取り組みを通じて、事件の風化を少しでも防ぐことが必要でしょう」

◆大きなビジネスに

――就任以来、病気の一步手前の状態である“未病”という言葉を繰り返し使用し、未病改善をテーマにした戦略を展開してきました。手応えはありますか

「超高齢化社会において成長産業となり得る未病産業という新たな産業を創出することで、健康寿命の延伸と日本経済の活性化を目指そうと平成26年に未病産業研究会を発足させました。現在、参加企業数が400社を超えるまでに増え、改めて“狙いは正しかった”という思いを強くしています」

――未病改善はどのような社会をもたらすのですか

「これまでの医療の常識では、健康な状態と病気という2通りしかありません。一方、われわれが提唱する未病とは健康から病気に至るまでの変化の過程を指しています。医療産業は規制が非常に厳しく、新たな産業を創出することは困難です。だが、未病にはさまざまな産業が眠っており、これを産業化することで、大きなビジネスチャンスが生まれるはず。未病産業は社会システムを変える力があると思っています。未病改善により人生100歳時代の到来を予見しており、100歳まで健康な状態で生きる社会を築こうとしています。超高齢化社会が到来する中、神奈川から大きなうねりを起こそうと考えています」

――県民にはどのようなメリットがあるのでしょうか

「小田原や箱根など県西部は未病戦略エリアと位置づけています。未病センターを各所

に設け、温泉やレストランで健康関連サービスやメニューを提示するなど、意識啓発につなげております。県民はこれらに最も触れる機会が多いので、真っ先にメリットを受けるはず。これからは未病改善を目的とした観光ツアーもつくり、地域経済の活性化につなげようとしています」

ー未病をテーマに海外戦略も打って出ていますね

「超高齢化社会を迎えた神奈川は課題先進地域でもあります。知事就任以来、交流を続けている世界保健機関（WHO）を昨年10月に訪問し、県職員をWHOに派遣することを決めました。これを機会に未病改善こそが、世界の健康医療の中心になるとアピールしていきたい。そんなに遠くない時期に、日本政府も未病改善の取り組みを本格化させるのではないかと期待しています」

◆スポーツ振興期待

ー2020年の東京五輪・パラリンピックの開催が3年後に迫っています。県内ではセーリング競技が江の島沖を会場に行われますが、どんな期待を持っていますか

「今回の五輪では、大会後のレガシー（遺産）をどうやって残していくかということが重要になっています。大会終了後も、江の島および湘南の海を世界中の人々が憧れるような仕掛け作りをしたいと思っています。その前に（片瀬海岸と江の島を結ぶ）江の島大橋の3車線化など受け入れ態勢の準備を急がないといけません。また、せっかくの五輪開催なので、競技を見て楽しむだけではなく、自らスポーツにふれるという機会を作りたい。県は現在、スポーツ推進条例の制定を目指していますが、神奈川ならではの視点として、スポーツを通じた未病改善なども盛り込めればと考えています。県はパラスポーツ（障害者スポーツ）推進宣言も制定しており、『ともに生きる』といった精神のもと、皆でスポーツを楽しむという流れを作りたい」

ー2期目の黒岩県政も折り返しを迎えます。今年1年をどのように展望しますか

「超高齢化社会など神奈川が課題として感じていることは世界全体が大きな問題として捉えていると確信しています。圧倒的なスピード感を持って、神奈川ならではの将来モデルを作っていきます」

【プロフィール】黒岩祐治 くろいわ・ゆうじ 昭和29年9月26日生まれ。神戸市出身。55年、早稲田大学政治経済学部を卒業し、フジテレビに入社。「報道2001」のキャスターを務め、救急医療キャンペーン（平成元～3年）が救急救命士の誕生に結びついた。21年、「新報道2001」のキャスターを降板して退社後、国際医療福祉大学大学院教授。23年4月の知事選で初当選し、現在2期目。62歳。

相模原殺傷 施設建て替え素案、初旬にも

読売新聞 2017年01月01日

相模原市緑区の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で46人が殺傷された事件を受け、県は1月初旬にも、園の全面建て替え計画のたたき台となる基本構想の素案をまとめる。同10日に予定される公聴会で素案を示し、障害者団体などの意見を聞いて最終案を作る方針で、3月には基本構想が正式決定する。素案では、園の生活環境の向上を図るため、居住棟を1人部屋中心にするほか、入所者が食事したり交流したりできるスペースを設ける予定。また防犯対策として、不審者を感知するセンサー付き防犯カメラの設置を検討している。公聴会では県内の障害者団体と意見交換し、家族会や入所者の声も反映しながら作業を進める。園の再建を巡っては、県が昨年9月、園を運営する「かながわ共同会」と家族会の要望に応じる形で、部分改修にとどめずに全面的に建て替えることを決めた。費用は60億～80億円が見込まれており、4月以降、居住棟や管理棟の取り壊しが始まる。県は敷地内に、事件を風化させないための慰霊碑の設置なども検討。「地域住民や園の職員らが、事件による負のイメージを払拭できるような園にしたい」としている。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行